

エヴリヤ・チェレビーの目を通して見るオスマン帝国のクルディスタン支配

大川さやか

目次

- 第1章 始めに
- 第2章 歴史的背景
- 第3章 エヴリヤ・チェレビーについて
- 第4章 ビトリスについて
- 第5章 ビトリスの有力者達
 - 1. アブダル・ハーンについて
 - 2. ズィヤーエッディン・ハーンについて
 - 3. モラ・メフメトについて
- 第6章 考察
 - 脚注 参考文献

第1章 始めに

17世紀、オスマン帝国は、東南アナトリア地方などの部族を支配する際、伝統的に支配階層にあった人間をうまく利用しつつ支配下に取り込んでいったと言われる。本稿ではオスマン朝支配者と伝統的な地方支配層の関係や、部族の支配者が帝国の支配下に取り込まれていく過程について見てゆき、この点を検証したい。

オスマン帝国がクルディスタンへ封建制度を導入するにあたり、クルド人支配層をうまく利用していた、という事実はすでによく知られている。Hakan Özoğluによると、オスマン帝国はクルドの政治組織の複雑さから部族の統合が困難であった為、部族レベルより上の、より大きな団体にまとめようとした。その為、忠実なクルド人支配者には行政上の特例である後継者権を与えるなどし、表向きは伝統的クルド支配層を支援するような政策をとり、結局クルド人支配者は力を維持する為にオスマン帝国に依存するように仕向けた。結果として17c後半には、自治的クルド首長国は残っていたが、帝国の権力増大とともに大半が行政システムに統合され、クルド首長国は、基盤は守れていたものの、その大半がオスマン帝国の要求に応じるまでに自治性が低下していたという。¹また、S.C.ペレティエによると、オスマン朝支配者はある家族から取り上げた土地を他の部族や他の家族に与えるなどし、部族間、部族内に「争いの種」をまくことで反乱を起こす恐れのある人間を管理した。このような方法でクルド人が服従させられたという説明は、安易すぎると思われるかも知れないが、実際オスマン帝国は、ある家族をその親戚と対立させたりすると同時に、ある部族や家族がその対立者を完全には滅ぼしてしまわないような配慮、つまり、恨みを持った犠牲者を、後日、争いの種に再利用するため保護するということまでしたと言われている。²

さて、このオスマン帝国が地方部族を支配下に置こうとしていた時代に活躍していたエヴリヤ・チェレビーという旅行家がいた。彼は伝統的クルド部族が支配していたビトリスを訪れた際の彼の見聞をその旅行記の中に残している。この旅行記に関しては、Robert Dankoff がオスマントルコ語を英語とトルコ語に訳した研究があるので³、本稿ではその史料を利用し、オスマン帝国から派遣されたパシャとクルド部族長の関係や様々な出来事の経緯を整理し、オスマン支配への編入期のクルド部族の動きを読み取ってみたい。

論文の構成としては、第2章でこのクルディスタンの時代背景を見た後、第3章、第4章で旅行家エヴリヤ・チェレビーとビトリスについて簡単にまとめる。そして第5章でビトリスに関するオスマン帝国の支配方法を知る上で重要と思われた3人の地元有力者についてエヴリヤ・チェレビーの旅行記からまとめ、第6章で考察したい。

第2章 歴史的背景

¹ Özoğlu, Hakan, "State-Tribe Relations: Kurdish Tribalism in the 16th and 17th-Century Ottoman Empire", *British Journal of Middle Eastern Studies*, 23/1, 1996, pp.17-23

² S.C.ペレティエ 『クルド民族 中東問題の動因』 亜紀書房 1994 pp.27-28

³ Dankoff, Robert, *Evliya Çelebi in Bitlis*, E.J.Brill, Leiden, 1990

主な出典は、Özoğlu,Hakan, “State-Tribe Relations:Kurdish Tribalism in the 16th-and17th-Century Ottoman Empire”による。

10c以前は部族を統合したような社会的、政治的な機能を持ったクルド組織はまだ見られない。

990 - 1096年まで北クルディスタンのMayyafiriginにマルワニド朝というクルド系王朝が存在した。しかしこの王朝はバグダードのカリフに公式に認められ、公用語としてアラビア語を使っていたことから、クルド系王朝でありながらアラブ的色彩が強かったとされている。また、1171 - 1260年までエジプト、シリアも支配下に置いたアイユーブ朝もクルド系王朝であるが、支配者が自らをクルド起源と論ぜず、クルディスタン領も少なかったため、クルド系王朝とは分類しにくいところもある。

その後、13cのモンゴル侵入、14cのティムール朝の征服により、クルド系王朝やクルド部族は大きな打撃を受け、支配力を弱める。

15cのカラコユンル朝の支配下では、クルド部族長はちからを得る為にカラコユンル朝に協力するが、その後のアクコユンル朝の支配下では、かえって以前のカラコユンル王朝との協力関係のために迫害を受けることになる。Sharafnameによるとアクコユンル朝の支配者ウズン・ハサンは、クルディスタンの主要支配家族（特にカラコユンル朝に忠実であったもの）を皆殺しにすることを当然としていた人であったという。⁴サファヴィー朝の支配下でも、クルド部族は中央集権政策のもと直接支配を受ける。⁵

オスマン帝国は東の国境を守る為、サファヴィー朝に戦争を仕向けた。この2国間の争いは、16cから18cのサファヴィー朝の終わりまで続く。スレイマン1世の統治間(1520 - 1566)は、東の国境拡大の為の戦争がよくクルディスタンで行われた。この間、どちらの帝国もクルディスタンを完全征服することはなく、従ってクルド部族の両帝国への忠誠も揺らぎ続けた。⁶ムラト4世が1638年、バグダードを征服し、オスマン - イラン間の新たな国境が定められると、その後両国間での大きな争いはなくなる。そのためオスマン帝国はクルドをオスマン朝の政治、行政システムに取り込むことに力を入れた。

オスマン朝の行政は、中央政府、地方行政の二つからなり、地方行政にはある程度の柔軟性が見られた。そのため当初のクルド首長国にはある程度の特権が与えられていた。国境の地として、クルディスタンはオスマン帝国にとって重要な位置にあった。オスマン帝国は戦略上の重要性からクルド部族の統一を図るが、クルド部族は広く分布した部族もあれば力強い連合部族もあり、それはかなり困難なことであった。その為オスマン帝国は‘統一と支配’政策を導入する。これは、クルド部族を部族より上のより大きな団体にまとめようとしたものであった。オスマン帝国は、サファヴィー朝、アクコユンル朝とは対照的に、伝統的クルド支配層を支援する政策をとった。これは、クルド領におけるオスマン朝の政策を記したスレイマン1世によるfermanによく

⁴ Bruinessen,Martin Van, Agha,Shaikh and State:The Social and Political Structures of Kurdistan, Zed Books Ltd, London, 1992, p.137

⁵ Hakan Özoğlu, op.cit., pp.11-12

⁶ 永田雄三・羽田正『世界の歴史 15 成熟のイスラーム社会』中央公論社 1998 pp.329-344

表れている。⁷忠実なクルド人支配者には行政上の特権である後継権が与えられたため、自治に近いほどの特権となった。しかしこれが、クルド人支配者とオスマン朝のつながりを逆に強くすることとなった。オスマン朝は、同じ支配家系内に支配力を保つことに非常に気を使い、外見上は内部の勢力争いが自由であるかのような政策であったが、実際は支配家系の外にリーダーシップが移った事はなかった。オスマン帝国は伝統的支配者を守り、その力を固めた。国家が世襲制を支援することで権力争いも止んだが、これが結果的に国家の協力に強く依存したクルドリーダーシップの形成を容易にし、オスマン帝国のクルド部族への介入もまた容易になった。国家の弾圧と一家系に支配力を持たせ、神秘的特権を持たせることで団結を強めた点からは、クルド首長国は国家の創造物とも言える。⁸

エヴリヤ・チェレビーはその旅行記の中でスレイマン1世の kanunname をあげ、ディヤルバクルの伝統的オスマン支配域に、オスマン行政の二つのタイプがあることを紹介している。⁹クルドサンジャックとクルドヒュキュメトである。クルドサンジャックは、クルド支配家系内に支配の継承が留まり、スルタンによって支配者が追放されることがないものである。通常のサンジャック同様、timar,zeamet,has の土地から成り、その所有者であるクルド部族民には、帝国内のその他の土地の所有者と同様に軍事義務があった。また、国家の財政調査により、その収入のいくらかは国庫へ行った。クルドヒュキュメトは、高度の自治権を持っていた。これらの首長国は地理的に国境に近い近づくにくい場所に位置し、内部問題への介入を嫌った。クルドヒュキュメトは税も払わず、軍役も果たさなかった。このような首長国は帝国にとって怖い存在でもあり、強力な首長国はクルドサンジャックとなるかより大きな首長国と統合した。しかしこれらの首長国も 19c には完全にオスマン帝国に統合された。

1518年の税に関する記録から、ディヤルバクルのクルドサンジャックは税の義務を負っていないことが分かり、このことからクルド部族が高い自治権を持っていたことがうかがえる。スレイマン1世の統治間、(1520 - 1566年)東の地域の新たな統合によりディヤルバクルに属していたサンジャックが他のエヤーレットへ移され、新たなエヤーレットがいくつかできた。1527年のオスマン帝国の資料から、ディヤルバクルを直接支配地域と、間接支配地域に明確に区別していたことがうかがえる。前者はサンジャック、後者はエヤーレットと呼ばれており、より多くのクルド首長国が文献に現れ始めることから、国家がクルド部族の監視と統合を開始する為に権力を行使していたことが分かる。1527年の資料でクルド首長国が エヤーレットとされているのに対し、16c 後半の資料では Ekrad Sancağı (クルドサンジャック) と ヒュキュメトとされており、自治性が少し弱いものとなっている。16c の終わりまで、クルドサンジャックは他のサンジャックに比べるとまだ自治性があった。1632年、アジズ・エフェンディによる Kanun-name-I Sultan li Aziz Efendi の中で、オスマン帝国のクルド人支配者への侵害によりクルド人支配者間の不満が増加していると書かれている。彼はその中で、ムラト4世にこのことがクルドのサファヴィー朝

⁷ Hakan Özoğlu,op.cit.,p.18

⁸ Ibid,p.19

⁹ Ibid,pp.20-22

への移行を引き起こすと警告している。¹⁰またエヴリヤ・チェレビーはヒュキュメトの大半が 17c 中頃にはかなり自治性を失っている姿を描いている。ヒュキュメトが国家の要求に応じるようになり、不満があると国家が政治、軍事的介入をして同族の人間と支配者を入れ替えた。エヴリヤ・チェレビーはクルド部族がその自治性を失って行くところにちょうど遭遇していると言える。ビトリスの世襲支配者であったアブダル・ハーンに対し、メレック・アフメト・パシャがどのように軍を組織しアブダル・ハーンを息子のズィヤーエッディンと入れ替えたかが分かる。このビトリスでの経験から、オスマン国家の支配の手法がはっきりわかると考えられる。それゆえ本稿では、ビトリスのクルド系支配者を取り上げることにする。

第3章 エヴリヤ・チェレビーについて

始めに、本稿で主な史料とする旅行記を書いたエヴリヤ・チェレビーについて紹介する。主な出典は“Evliya Çelebi”, Türkiye diyanet vakfı, İslam Ansiklopedisi, Cift11, pp529-533、Dankoff, Robert Evliya Çelebi in Bitlis, pp.3-6 による。

エヴリヤ・チェレビーは旅を本職とした珍しい旅行家であった。40 年以上にわたり地方へ派遣されるパシャについてオスマン帝国中を旅し、国外へ大使として派遣されるパシャについて周辺の国々も訪れ、10 巻にわたる旅行記を残している。この旅行記は今日でも地方社会を知るための重要な史料となっており、また、彼の生涯についてもその膨大な旅行記から伺うことができる。

ビトリスへは彼の母方の親戚であるメレック・アフメト・パシャについて 1655 年から 1656 年にかけて 3 度訪れている。ビトリスに関する部分は、彼の旅行記全 10 巻中の 4 巻から 5 巻にかけて収められており、旅行記全体の約 2.5% を占めている。これは、他の都市に関する部分よりも多く、イスタンブルに関する部分が 10%、カイロに関する部分が 5% ということからもうかがえる。

¹¹

彼の母は奴隷としていとこのメレック・アフメト・パシャとともにアフメト 1 世に捧げられ、¹²Derviş Mehemed Zıllı Efendi という名の宮廷金細工職人であった彼の父と結婚した。彼は 1611 年 3 月 25 日イスタンブルのウンカパヌで生まれた。誇張表現を非常に好んだ彼だが、彼によると当時家には 70 人ほどのウレマーやシェイフがいたという。¹³

彼は非常によい教育を受けた。シェイフイスラム・ハミッド・エフェンディ・メドレセで 7 年間勉強し、イマーム・エヴリヤ・メフメト・エフェンディからコーランを学び、父からは書道を学んだ。エヴリヤ・チェレビーという彼の名は恐らく彼の師であるイマーム・エヴリヤ・メフメ

¹⁰ Ibid, p.23

¹¹ Dankoff, Robert, Evliya Çelebi in Bitlis, E.J.Brill, Leiden, 1990, p.6

¹² Dankoff, Robert, The Intimate Life fo an Ottoman Statesman Melek Ahmed Pasha(1588-1662) as Portrayed in Evliya Çelebi's Book of Travels (Seyahat- name), State University of New York, Albany, 1991, p.3

¹³ “Evliya Çelebi”, Türkiye Diyanet Vakfı, İslam Ansiklopedisi, Cift11, İstanbul, 1996, (以下 İA. “Evliya Çelebi”) p.529

ト・エフェンディから付けられたものである。¹⁴宮廷に入ってから、声が美しかった為に音楽も学んだ。少ししてメレック・アフメト・パシャ等を通じてムラト4世に紹介され、彼はしばしばムラト4世の御前で冗談などを言い喜ばせた。¹⁵宮廷の環境は彼の文学の才能や経験を増やすのに役立った。彼は宮廷に4年間とどまった後、騎兵隊に加わることで生活を保証される。

旅行への興味は、彼の父や父の友人らから旅行の話を書くうちに養われたものと思われる。また、旅に出ることになった動機を自らある夢と関連づけているが、それは1630年8月19日イスラム暦の正月にあたる月に預言者が彼の夢に現れ、彼に旅の意思を与えた、というものであった。

16

イスタンブルを歩き回り知識を深めた彼は、1640年のブルサへの旅行で初めてイスタンブルを出た。しかし父の許可なく行った為に、ブルサから戻ると父に旅行の際の許可を得ることと、旅行記をつけることを勧められる。その後彼は様々なパシャの地方知事任命に伴ったり、地方遠征に参加するなどしてオスマン帝国各地を訪れる。1641年にセルダル・ヒュセイン・パシャの命令でAzak城を取り戻す為の航海に加わった際には、クリミア半島からイスタンブルへ戻る途中ひどい嵐に会い、船が沈没しそうになる、という災難にみまわれる。この時の恐怖で次の1645年のユスフ・パシャのクレタ島遠征に加わるまで、4年の間があいたこともあった。クレタ島遠征の翌年、財政大臣の息子メフメト・パシャのエルズルム知事任命に同行してエルズルムにいた彼は、そこから初めてのオスマン帝国領外への冒険となるタブリーズへの使節との同行をすることとなり、アゼルバイジャンやグルジスタンを訪れる。イスタンブルへ戻る途中、オスマン朝に対する反乱をしていたパシャらへメフメト・パシャが連絡をとるための手紙を届けるという任務により、反乱者達(Celali)と知り合った彼は、彼らの反乱や処刑を目撃し、記録している。

1650年、彼の母方の親戚にあたるメレック・アフメト・パシャが宰相になったことは、彼の人生にとっても重要なこととなった。彼はメレック・アフメト・パシャの側近の1人となり、メレック・アフメト・パシャがオジヤルメリ、ヴァンのベイレルベイに任命されるたびに彼について行動し、様々な場所を訪れた。

1663年、ファズル・アフメト・パシャのオーストリア遠征に加わり、Uyvar Kalesiの征服後はボヘミア、スウェーデン、オランダを訪れる。バグダッドへ戻り、シュフラブ・メフメト・パシャに手紙を届けるためボスニアへ行った彼は、ここでベニス国境の部族の活動に加わり、その後ハンガリーへ戻ってRaab戦争を記録する。1664年にVasvar条約の後、新たに征服された要塞を訪れる為カラ・メフメト・パシャの従者となってウィーンで皇帝や総司令官をと会い、帝国の許可を得て、デンマーク、オランダ、等に行ったと彼は記録しているが、これは少し疑わしいと思われる。¹⁷

1668年、イスタンブルへ戻ると、ルメリの町々を訪れ、アナトリアからクレタ島へ行き、Kandiye

¹⁴ İA. "Evliya Çelebi", p.529

¹⁵ İA. "Evliya Çelebi", p.529

¹⁶ İA. "Evliya Çelebi", p.530

Dankoff Robert, *op.cit.*, p.4

¹⁷ İA. "Evliya Çelebi", p.530

Kalesi の包囲を記録し、ギリシアでは Manyot 反乱者らの追放を記録し、1670 年再びイスタンブルへ戻る。

数ヶ月イスタンブルに滞在した彼は、かねてから望んでいたメッカ巡礼の旅に出る。ここでもまた、その動機をある夢に関連づけている。その夢とはエユップ・スルタンの墓を訪れた後、のもので、父と彼の師であるイマーム・エヴリヤ・メフメト・エフェンディが現れ、彼にメッカ巡礼を勧めた、というものだった。¹⁸1671 年、彼は巡礼の旅に出るが、これは彼にとって初めて自らグループを作った旅であった。

メッカ巡礼を終えた彼は、エジプトへ行った。そこでスーダンやエチオピアなどの地方をまわった。彼はエジプトに 10 年も滞在し、恐らくここで旅行記の 10 巻を仕上げたと思われる。そしてここで友人となったエミル・オズベク・ベイのコレクションへこの 10 巻めを入れた。しかしマフムト 1 世の時代に、黒人宦官長であるハジュ・ベシル・アガへの贈り物としてイスタンブルへ持ってこられた。¹⁹

旅行記の 10 巻は欠けた状態で突然終わっている。これは彼が作品を終えることなく死亡したからと思われる。死亡した日時や場所についての明確な情報はない。旅行記 10 巻に見られる最後の行動から 1684 年である、とする推測もあれば、エジプトからイスタンブルに戻ってから、とする推測もある。²⁰

彼の作品から知れることとしては、彼は機敏でスポーツにたけ、他人の話をよく聞き機知に富んだ会話ができ、誰とでもうまくやって行くことのできる人間であったという点である。政府の役人にもたくさん知り合いがいたにもかかわらず、欲に心奪われることなく、生涯結婚せずに一生を旅に費やした。また彼は、旅のために時々手紙を運んだり、地方の村の歴史を書いたり、税を集めてまわったりもしたがあくまで本職は旅行であった。家族が裕福であったことも旅ができた理由であり、事実旅には奴隷や召使を連れていた。また遠征に参加した際の戦利品の分け前なども収入源となっていた。

メレック・アフメト・パシャは彼にとって非常に重要な存在であった。彼の旅行記における主人公はこのパシャであると言ってもよい程で、彼が自分自身について書いている部分は全体の 5% でしかない。²¹オスマン朝における自分が忠誠を誓う人への義務として、その人を褒め称えることもあったために、彼はパシャの弱点を隠すだけでなく、彼をより英雄的に誇張して書いていた。パシャがオジイ、ボスナ、ルメリ、ヴァンディヤルバクルなどのベイレルベイであった時、彼のもとにずっとついて様々な土地をまわり、自ら“Melek Ahmed Paşalı”と自分自身を呼んでいた。

²²

半世紀に近い旅行で豊かな知識と経験を身につけていた彼だが、書道や音楽にもたけ、様々な場所でそれを証明しており、彼のカラヒサル式の書道はトプカプ宮殿の中に今もおかれている。

¹⁸ İA. “Evliya Çelebi”, p.531

¹⁹ İA. “Evliya Çelebi”, p.531

²⁰ İA. “Evliya Çelebi”, p.531

²¹ Dankoff, Robert, op.cit., p.7

²² İA. “Evliya Çelebi”, p.531

また訪れた各地で目にしたミニチュールや本の感動についても彼の作品の中で触れられており、その繊細さや上品さ、教養から自らを“ Evliya-yı bi-riya ”「正直なエヴリヤ」と表現している。²³

彼の作品は説明がとても素晴らしく、所々に見られる文法的間違いにも関わらず読む人を惹きつける。²⁴また彼が尋ねた地方の住人の言語も、会話調で記録されており、重要な資料となっている。単純で率直な解説や会話調で話を進めることで読み手に話しかけるような書き方がされている。²⁵研究家の中には、旅行記を回顧録としてみる人々もいる。彼は物事をからかいの目で見たり、出会った人々のまねをすることにためらいを見せなかった。また、物事に色づけをする為にでっちあげの情報や事件を述べることもあった。これは読み手の関心を引く目的と思われる。たとえば象が通った村の女性が象を産んだ、予言をする洞窟、手の施しようのない病気の治療法を見つける医者、等。普通の物事にこれらを付け加えて使った。²⁶また、訪れた地に自分の足跡を残したい、という思いと謙遜の気持ちから、建物の壁に“ Evliya ruhiyçün el-Fatiha ”「エヴリヤの魂にコーランの開章を」(墓石に書かれる文句)と書くほどの冗談のセンスの持ち主だった。²⁷

第4章 ビトリスについて

次に、本論の舞台となるビトリスについてまとめる。主な出典は“Bitlis”, Türkiye diyanet vakfı, İslam Ansiklopedisi, Cift6, pp.225-228 による。

チグリス川の支流であるボタン川の南東、トロス山脈の間に開ける狭く深い谷にあり、海拔 1400 - 1450mに位置する。ビトリスのこの地理的特徴は、歴史の中で重要な意味を持った。というのは、東アナトリアと南東アナトリアを引き離した南東トロス山脈を超えることはほとんど不可能であったからだ。ビトリスはこの山岳地帯の比較的狭い地域に切り開かれた谷にあった。el-Cezire 平原を東アナトリアの中心の大地へ、そこからイランやコーカサスへとつながる、南東トロス山脈を超える道にあったので古くから貿易キャラバンの通路となり、また家畜をつれ南北へ季節ごとに移動をする人々もここを通らねばならなかった。この重要な通路管理のために巨大で威厳のあるビトリス城が、今日の町の西方に位置するビトリス川とその支流の間で、2つの谷が防御となり、その間に険しく切り立った狭い尾根の上につくられた。

ビトリスの街の中心となる城に最初に誰が住んでいたのかは知られていない。しかし古くから言われる伝説として、この城がアレキサンダー大王の命令により Badlis 司令官により作られ、今日のビトリスの名も彼の名によるものだというものがある。²⁸城は今日までに何度か修理され、されに何度か完全に破壊され、もともと作りなおされた。アレキサンダーの時代後は、古代 Selevcia 人の手に渡り、その後サザン朝とローマ帝国の間で頻繁に支配が移り変わった。ローマ帝国が 395

²³ İA. “Evliya Çelebi”, p.531

²⁴ Dankoff, Robert, op.cit., p.16

²⁵ İA. “Evliya Çelebi”, p.532

²⁶ İA. “Evliya Çelebi”, p.532

²⁷ İA. “Evliya Çelebi”, p.532

²⁸ Dankoff, Robert, Evliya Çelebi in Bitlis, E.J.Brill, Leiden, 1990, pp.48-57

永田雄三・羽田正『世界の歴史 15 成熟のイスラーム社会』中央公論社 1998 p.329

年に2つに分けられた後は、東ローマ帝国の国境内に収まっていた。

Ömer カリフの時代、el-Cezire 平原の征服者 Iyaz b.Ganim に征服される。その後ビザンツとムスリムアラブ人の間で支配が何度かうつったビトリスは、Sugur と Avasim の境界線付近に位置を占めた。Emevi (Omayyad) カリフの Abdülmelik b.Mervan の時代にその兄弟 Muhammed b.Mervan によって el-Cezire 県に加えられ、ディヤルバクルに含まれ、その後アッバース朝時代にはディヤルバクルの支配者となった Hamadaniler と Mervaniler に従属して統治された。

ビトリスは 10 c ビザンツと Mervani の間の国境の国となった。11 c には Turkmen の攻撃がこの地域に達し、1047 年にはセルチューク朝の支配が始まった。しかし再び Mervaniler の手に渡る。このトルコ人の攻撃の 1 年前にここを訪れたイラン人の旅行家で詩人の Nasir-I Husrev はビトリスにおいて蜂蜜の生産が大量になされていた、と記録している。²⁹ビトリスがはっきりとセルチューク朝の支配下に置かれたのは 1085 年で、セルチューク朝に従属する Dilmaçoğulları Beyliği の首都がビトリスであった。しかし、1192 年にベクテミュルがビトリスを記録した後、Dilmaçoğulları Beyliği にビトリス軍は見られなくなり、このベイリッキはエルゼン周辺を支配するようになる。

1209 年、ビトリスをアイユーブ朝が統治する。一度セルチューク朝に奪われたビトリスをアイユーブ朝が取り戻すが、1232 年、再びビトリスはセルチューク朝の支配下に置かれる。ヤクットは 13c のビトリスが果物の豊富さで有名だったことと、また周辺の町へたくさんの果物が運ばれていたことを記録している。³⁰

14c、Şerefoğulları という一族が支配していたビトリスをカラコユンル朝が支配し、その後 1467 年にウズン・ハサンによってアクコユンル朝の支配下に置かれたのち、サファヴィー朝の支配下に置かれる。セリム 1 世がチャルディラン遠征から戻る際、(1514) İdris-i Bitlis がとりつけたビトリスの部族長らの協力により、オスマン帝国に従属することになるが、ビトリスの支配者がしばしばイラン側に傾いたためにこれは長く続かなかった。³¹

ビトリスはオスマン朝の管理下でエルズルムエヤーレットのムスサンジャックに従属した都市の 1 つであった。17c にここを訪れたエヴリヤ・チェレビーの残した資料によると、ビトリスの要塞内には 300 の家があり、要塞の約半分をハーンの宮殿が占めていた。要塞を囲む壁には 2 つ鉄の扉があり、そこからいちばやさらに数百の家のある下の要塞に通じていた。要塞の外にはさらに 17 の町が広がり、5000 ほどの家があった。³²

その、エヴリヤ・チェレビーが訪れた時代にビトリスを統治していたのがアブダル・ハーンであり、その息子のひとりがズィヤーエッディン、アブダル・ハーンに仕えていた家来の一人がモラ・メフメトであった。

²⁹ “Bitlis”, Türkiye Diyanet Vakfı, İslam Ansiklopedisi, Cift6, İstanbul, 1996,(以下 İA. “Btlis”) p.226

³⁰ İA. “Btlis”, p.226

³¹ Özoğlu,Hakan, op.cit., pp.12-13

İA. “Btlis”, p227

³² İA. “Btlis”, p.227

エヴリヤ・チェレビーのビトリスにおける旅行記に登場する多くの人々の中でこの 3 人は特に印象的であり、またこの 3 人を通してオスマン朝の支配方法が見えてくる気がする。そこで次章ではこの 3 人にしぼってふれてみたい。

第5章 ビトリスの有力者達

ビトリスに関するオスマン帝国の支配方法を知る為にエヴリヤ・チェレビーの旅行記から次の 3 人を取り上げる。

1、アブダル・ハーンについて

まず、メレック・アフメト・パシャを通じてオスマン朝とのやりとりを体験した、ビトリスの準独立クルド人支配者であった彼についてみる。彼は、メレック・アフメト・パシャがエヴリヤ・チェレビーをつれてビトリスで 10 日間の滞在をした際、パシャに対して大変豪華なもてなしをする。しかしパシャの滞在中は忠誠を誓ったが、何度かオスマン政府に対して反抗的な姿勢を見せていたため、パシャは彼に警告をしてビトリスを後にする。その後近隣の地区を襲ったことでパシャと戦うことになり、戦いの中で不利な立場に追い込まれビトリスから逃げ出す。メレック・アフメト・パシャがイブシル・パシャによってヴァンの職務からはずされると再びビトリスへ戻ってくる。

エヴリヤ・チェレビーの旅行記の中では、アブダル・ハーンは最初のパシャへの大変豪華なもてなしをし、素晴らしい城に住む、幅広い才能を持つクルド人支配者として描かれている。誇張表現をよく用いると言われているエヴリヤだが、彼によると「錬金術などの超自然的な科学の他にも、hadis における体の科学と宗教の科学の二つの科学に長けていて、ヒポクラテスもソクラテスも彼の前では生徒にもなり得ない。」という。³³エヴリヤがあげた具体的な彼の特技は、

優秀な内科医かつ外科医で、80 歳の阿片患者に新たな生命を与え若返らせ、屋根や馬から落ちた患者を 7 日で歩かせた。また獣医でもあり、馬の病気に詳しい。

素晴らしい馬乗りかつハンターで 1 日で 7 万羽のウズラを捕らえたこともあった。

建築学においても優れた技術者で、宮殿は自らの設計によるものであった。

言語学の知識も広く、アラビア語の本もすぐペルシャ語に翻訳した。(EÇ, pp.94-97)

等があり、この他にもエヴリヤによると彼は絵画や書道、詩、彫刻、音楽等の芸術的才能から、鉄製品や金製品、時計を作る技術までも身につけていたという。(EÇ, pp.96-105)

このように有能な支配者で、メレック・アフメト・パシャに対しても忠誠を誓った彼であったが、それまでもずっとオスマン朝と良い関係を保っていたわけではなかった。メレック・アフメト・パシャは 1635 - 36 年にもムラト 4 世の剣持としてビトリスを訪れ、アブダル・ハーンにもてなしを受けた。しかし 1638 - 39 年のムラト 4 世のバグダッド征服の際にアブダル・ハーンは

³³ Dankoff, Robert, *Evliya Çelebi in Bitlis*, E.J.Brill, Leiden, 1990 (以下 EÇ と本文中に出典を示す), pp.93-94

ディヤルバクルへ来てムラト 4 世に征服の成功を祝いに来るのを怠った。これに怒ったムラト 4 世は、メレック・パシャにアブダル・ハーンとムズリ族の支配者ユスフ・ハーンへの復讐を命ずる。メレック・アフメト・パシャはこれに従い、ディヤルバクルを統治していた際ユスフ・ハーンを捕らえる。しかしアブダル・ハーンに対して軍を進めていたメレック・パシャのもとへ 70purse と贈り物の品々を持った仲介人がアブダル・ハーンから送られてきたため、メレック・パシャはハーンが彼の統治しているディヤルバクルでなくヴァンにいるという理由で目を瞑った。さらにその後、メレック・パシャがエルズルムを統治していた際、アブダル・ハーンはエルズルムの夏営地に来ていたクルド遊牧民を襲い、7 万頭の羊を通行料として奪った。そしてメレック・パシャから手紙が送られると、その手紙を破き、「私は彼の領地にも管轄領にもいない。」と言い、手紙を運んだ人間を殺そうとまでした。しかしこの時も、メレック・パシャがちょうどエルズルムの職をはずされることでアブダル・ハーンはその手を逃れる。

メレック・アフメト・パシャはエヴリヤを率いたビトリスでの滞在の後、それらのことをアブダル・ハーンに思い出させた上で、あのころはハーンも自分も若かった、と彼のこれらの行動を許す。しかし、この 10 日間、自分をもてなした心を忘れず、決してひとりよがりになったり、クルドの強情さを出したり、ペテン師の意見に従うことなく、周囲の支配者らとの関係を大事にするよう警告する。また、自分が大宰相でムラト 4 世の義理の息子であり、不法に孤立することがあれば首を失うことになる、とハーンを脅す。これに対しアブダル・ハーンはパシャへの忠誠を誓う。

しかしメレック・アフメト・パシャがヴァンに戻った後、パシャのもとにエルズルムからの特使が訪れ、アブダル・ハーンがエルズルムのメラズギルドへ侵入し、300 人を殺し 4 万頭の羊を奪ったことを告げる。そしてすでに 2 万の兵をそろえていることと、自らの管轄下にいる彼を罰しなければパシャ自身の立場が危うくなる、と言う。パシャはハーンを罰しようと沸き立つ周りを抑え、まず彼に謝罪を促す手紙を送る。これに対しハーンはなんとかパシャの怒りを抑えようとする手紙を送る一方、パシャが手紙とともに奇襲をかけてくるのでは、と考え、周囲のクルディスタンのエミルに警告の手紙を出し、兵を集めさせる。ハーンの手紙によると通行料を払わず敵意を見せたのはメラズギルドのメフメト・ベグであり、反抗した者を罰したのみだ、とあったが、ヴァンの有力者らはそれをパシャの目をくらまそうとしているのだと主張し、結局ビトリスへの進軍が決定される。

メレック・アフメト・パシャ率いる大軍にアブダル・ハーンがかなうわけもなく、ビトリスは征服されてしまう。しかしメレック・アフメト・パシャがビトリスへ到着する頃には、アブダル・ハーンはすでにビトリスから逃げ出した後だった。以下はハーンの敗走についての記述となる。

アブダル・ハーンは、彼の庭から望遠鏡で戦いの様子を見ていてひどく不安になり怖気づいた。家族と持てるだけのものを持ち、5 千人のマスケット銃士をつれてムディキ山へと逃げた。そして親族であるムディキ・アリ・アガのところへ逃げ込んだ。しかし家族をそこに残すと彼はいくつかの山を越え、姿を消した。 (EÇ, pp.246-247)

ビトリスの新しいハーンには彼の息子であるズィヤーエッディンが任命される。そして彼の莫大な財宝の数々は、女性の所持品であるもの以外はすべてメラズギルドのメフメト・ベグへの略奪品の返済等の為にオークションにかけられてしまう。

しかし、メレック・アフメト・パシャがヴァンの統治からはずされたとの知らせがビトリスに届いた翌日、アブダル・ハーンはビトリスに戻ってくる。しかしそこはすでに息子のズィヤーエッディンが新たなハーンについた後だった。以下はズィヤーエッディン・ハーンとアブダル・ハーンの会話になる。

彼は父の前にメレックパシャが首都から持ってきた命令、出費の手紙、ローブなど、私がパシャから預かった物も並べた。父の足に顔をすりながら、「私は戦いの間パシャの命令でハーンとなりました。1年間、あなたの代理人として。今、メレック・パシャも任務を離れました。あなたが再びハーンとなってください。」と言った。「息子よ、私ももう80歳となった。矢は打たれ、弓も弛んでしまった。私はハーンの地位を受け入れるべきではないのだ。お前と、12人の息子と、私の目の光がある。ビトリスの町を治めるのだ。私の望みをかなえ、お前の母と私の家とともに、静かなところへ行かせて繰れ。そこでお前の成功を祈ろう。」とハーンは言った。しかし彼の目には屈辱が満ちていた。(EÇ, pp.341-342)

こうしてアブダル・ハーンは隠居生活を送ることとなる。隠居後のハーンは、ハレムにこもりあまり表には姿をあらわさなかったようだ。エヴリヤに対しては優しい扱いをするが、やはり彼の財産を奪って行ったメレック・アフメト・パシャには憎悪の念を抱いているようで、彼がとる行動は一族の他の人々がとる行動と共に恐怖としてエヴリヤ・チェレビーの目にうつっている。ハーンの周りの人々と共に、エヴリヤの心境の変化を通してそれを見ている。

アブダル・ハーンがビトリスに戻ってきたのはエヴリヤ・チェレビーがメレック・アフメト・パシャの命令で残りの負債分を徴収しにやってきた後だった。その為エヴリヤはアブダル・ハーンに忠誠を誓い、ずっとハーンのもとでビトリスに残ること言うが、ビトリスから逃げ出す隙をうかがっていた。その時の心境は以下のように書かれている。

我々にできることは、コーランを口にするのみであった。日々冬の厳しさが増してゆき、道はふさがった。パシャも役職を終えたもののまだヴァンを出てはいなかった。しかし、私はハーンやその側近をいたためにパシャのもとへ話し合いに行くことができなかった。だが私は毎日馬に乗り、雪の中をラフヴァやケフェンデルの方へと向かっては、ハーンやその他に属す農場で足止めを食らい、また町へと戻るのであった。もしハーンがそれについて尋ねると、私は「農場に行っていたのです。」「アラブ・ハルル・アガの農場で avşlalı kükü pilav を食べていたのです。」と答えた。決して嘘ではなく、どこへ行ったのかを答えたのだ。そして農場のものに確かめてもちゃんと確認が取れた。

このようにして常に動揺しつつ1ヶ月また過ごした。が、その感情は隠していた。毎日コーランを唱え、クルドウレマーとできる限りのシャリーアについての議論をしていた。しかし同時に、彼らにユーモアのない狂信者になってしまったを思われたくもなかった。だからハーンや兄弟のベディル、ヌレドヒル、部族長らが居る前ではジョークを言ったり歌を歌ったりした。彼らが私を従者の一人として受け入れるように。

この頃にはズィヤーエッディン・ハーンは私から片時も目を話さないようになっていた。寝る時さえも彼の部屋で寝させた。私は彼らに絶望し、彼のもとへ助けを求めるようになっていた。心の中には恐怖があった。昼も夜も警戒していた。階下には常に馬が用意しており、私も従者も武器を手にしていた。もし私が「boo」と言えば後は出発だけだった。(EÇ, pp.366-369)

エヴリヤがこのような感情を抱くようになった理由として、彼はアブダル・ハーンやベディル、ヌレドヒルへの失望と恐怖をあげている。ベディル、ヌレドヒルの2人は、食事の際に「なんということ、この皿は父とメレック・アフメト・パシャの戦いで略奪されず残ったものだ。」とって笑いエヴリヤの反応を見たり、メレック・アフメト・パシャがハーンの執事に任命したハイダル・ケトヒュダを(ハイダル・ケトヒュダが2人に唾をかけた、という無礼に対して)エヴリヤの目の前で殺す、など、メレック・アフメト・パシャへの憎悪をあらわにしていた。またアブダル・ハーンはエヴリヤに対して良い扱いをするが、エヴリヤの目の前でモラ・メフメトがハーンの命令で殺された直後にハーンの元へ向かう際、「私は丘を上りながら、いつか私も何らかの理由で殺すつもりだ、と思った。」(EÇ p.364~365)と書いている。また、ハーンのもとで、モラ・メフメトがハーンを裏切ったことが彼を殺した理由だ、とハーンから聞かされた際にも、エヴリヤは「それが本当ならば、彼の死体に石を投げつけましょう。」と言うものの、モラ・メフメトを今までで一番の魔術師であった、と表現しており、やはりハーンへの信頼は全くないように思える。またこれらのこと(ベディル、ヌレドヒルによるハイダル・ケトヒュダの殺害やハーンによるモラ・メフメトの殺害など)に怒りを覚えた、とも書いている。エヴリヤが安らぎを覚えたのは唯一ズィヤーエッディン・ハーンのもとに居た時だけのようなだ。ズィヤーエッディン・ハーン自身も語っているが、(EÇ,p.376で)、ビトリスのハーン一族の中で、彼だけは浮いた存在になっていた。エヴリヤはズィヤーエッディン・ハーンがヌレドヒルに殺害された直後、用意していた馬でビトリスから逃げ出す。

これらのエヴリヤと周りの人々の関わりを見ると、隠居後のアブダル・ハーンはビトリスにおいて昔持っていたような影響力や権力を明らかに失っており、また新たにハーンとなったズィヤーエッディンが以前のハーン程の影響力を周りに対して持っていなかったため、兄弟内での争いがおこり、それが直接ビトリスの政治を揺るがす原因となっているように思われる。

のちに、無事ビトリスから逃げ出したエヴリヤにアブダル・ハーンは手紙を送っている。その内容は

何故夜に逃げ出したりしたのです。クルディスタンはいつもあのようなことを知らなかったのですか？～省略～私と息子のズィヤーエッディンのことを忘れないでください。私の氏族、部族、そしてクルディスタンの人々すべてがシャリ - アによって我々のハーンを殺した者へ復讐する、と立ち上がりました。彼らはヌレドヒルを殺しました。3日のうちに私は2人の息子を失ったのです。(EÇ, pp.392-393)

というものだった。アブダル・ハーンは結局、オスマン帝国により多くの財産と支配者の座を奪われただけでなく、一族の中に争いをもたらされ、その結果として二人の息子の命をも失った。

2. ズィヤーエッディン・ハーンについて

ズィヤーエッディン・ハーンはアブダル・ハーンの息子であり、メレック・アフメト・パシャがビトリスを訪れた際、メレック・アフメト・パシャの配下となったものと思われる。アブダル・ハーンがメレック・パシャとの戦いに負けてビトリスから姿を消した後、メレック・パシャによってビトリスの新たなハーンに任命される。しかし兄弟からは恨みをかい、結局兄であるヌレドヒルに殺害される。オスマン朝の手下として扱われた彼についてみる。

メレック・アフメト・パシャがビトリスでの滞在を終え ヴァンへ向けて旅立つことになり、アブダル・ハーンと互いに贈り物を交換した際、アブダル・ハーンはハサンとヒュセインという二人の息子をメレック・アフメト・パシャへ差し出した。以下はその時のやりとりとなる。

ハーンはパシャに再び豪華な食事を用意した。それが終わると、彼の息子ハサンとヒュセインを両手につなぎ、パシャの前に差し出した。そして

アリはソロモンにバツタの足を贈りました。

あなたに見合うものがあるならば何でも差し出しましょう。お受け取りください。

という詩をうたった。

「その寛大さがあなたの持つものです。」という、子羊の足を耳元へ持ち、「これら私の息子をあなたに従えさせてください。」と言った。ハサンとヒュセインは持っていたキャンディーを差し出し、パシャの手にキスをすると、コーランも取り出し、パシャへ差し出した。パシャは2人の少年を胸に押し付け、2人を両側に置くと、「ハーン、この2人の王子を私息子とさせてくれ。神もこの子達を私に従えさせることを許してくださるだろう。彼らをあなたのもとへ残そう。そして教育をしてくれ。私はそれぞれを私の被保護者としよう。」と言い、2人をハーンのもとへ戻した。(EÇ, pp.155-156)

ズィヤーエッディンがメレック・アフメト・パシャの配下となった場面はエヴリヤに書かれてはいないが、彼もこのようにして同様にパシャの配下になったと思われる。

その後、メレック・アフメト・パシャとアブダル・ハーンが戦い、アブダル・ハーンがビトリスから逃げ出した後、1655年6月31日、ビトリスのウレマーやシェイフ、長老者など、すべて

の有力者が集まる前でメレック・アフメト・パシャにより新たなビトリスのハーンの任命が行われた。以下がその時の様子となる。

その日、ビトリスのウレマーやシェイフ、長老者など、すべての有力者が Divan に集められた。最初にザル・パシャの娘の子であるズィヤーエッディン、彼に続きアラブ・ハヌムの子ベドレッディン、そして内妻の子ヌレッデヒルが入ってきた。3人ともハーンの子である。3人はビトリスの有力者とともに入ってきて深くお辞儀をし、パシャの手にキスをした。

パシャがこの家に客として訪れた際、パシャは彼らを自らの被保護人とした。～省略～

彼らの代表モラ・メフメト・ブフティが「大宰相、何故我々が集まったのかお分かりでしょう。我々の意見はまとまっています。我々はこのズィヤーエッディン・ベグをあなたの約束のもとハーンにさせていただきたい。その嘆願をしに来たのです。」といった。パシャは「望み通りにしよう。しかし、このベグをハーンにしたら、おまえ達は彼に協力するか？」と尋ねた。すべての人が誓った。「彼のためにすべてを捧げます。年老いたハーンのもと、50年間悩まされてきました。その間町は荒らされ、人々は苦しめられてきました。それゆえズィヤーエッディンに従います。しかし大宰相、あなたへの我々の最初の願いは、たくさんの人々の命を奪い、ここにいる息子達さえも嫌っているアブダル・ハーンを捕らえることです。皆が彼の死を願っています。」

パシャはすぐこれに答え、～省略～を「ハーンが活着ている間は、ビトリスの征服も、いかなる安全も得られない。」とハーンの追跡に向かわせた。そして続けた。「ビトリスの人々よ、あなた方はズィヤーエッディンをハーンとすることを望んだ。しかし以前のハーンは、ヴァンの garrison に 200 の金銭、メラズギルドのメフメト・ベグに 4 万の羊の借りを作っている。このあなた方の Beg は、これらの借りの保証人となるか？これに同意し、保証人となり、返済へのあらゆる努力をするのなら、このベグにロープを与え、パディシャフにこの結果を伝えよう。だがこれに同意できないのなら、私はスレイマン 1 世の時代にウレマー・パシャに預けられたように、ビトリスの支配をオスマン政府に預け、その結果をパディシャフへ伝えよう。」

人々は「分かりました。昔のハーンの借りは返します。オスマンの支配下には置かないでください。」と叫んだ。

そして、「ハーンが逃げ、城内の彼の財産はエヴリヤ・エフェンディに封をされています。ハーンの庭も門番長に封をされ、300 人がガードしています。どうかそれらを売り、返済に当てさせてください。」その案は受け入れられ、コーランが唱えられ、誓われた。

こうしてズィヤーエッディン・ベグがハーンとなった。彼は深紅のピロードで縁取られたクロテンの毛皮と、ロープ、羽飾りを与えられた。大テントの前で 10 の大砲がうたれ、門番長がハーンの母にそれを知らせに行った。～省略～

まず彼の兄弟ベディルとヌレッデヒルが忠誠を誓いに前へ出てきた。私は後者の目が潤んでいるのに気付く、彼が恨みを隠しているのを知った。 (EÇ, pp.274-279)

しかし、ヴァンの統治権がメレック・アフメト・パシャからペフレリ・アフメト・パシャへ移ったというニュースが届いた翌日の1656年2月26日、アブダル・ハーンがビトリスへ戻ってくる。恐怖から人々は贈り物を持ってアブダル・ハーンに挨拶に訪れ、ズィヤーエッディン・ハーンもそれに続いて父に挨拶する。その時の様子はアブダル・ハーンに関するところにあった通りとなる。

ズィヤーエッディン・ハーンはある夜、エヴリヤ・チェレビーに自分の苦しい心境を語った後、彼の兄であるヌレッデヒルに殺害される。以下はズィヤーエッディン・ハーンとエヴリヤ・チェレビーの会話と、ハーンが兄に殺害される場面になる。

我々は2時間ほど話した。最後に彼は、「もし冬でなければ、クスグン・クラン山を一夜で超えてヴァンの父メレック・アフメト・パシャの足元に顔をすりつけるだろう。彼のために皿洗いをした方がまだ気が楽だ。」「もしあなたがオスマン帝国に征服すれば、彼らは数ヶ月はいい扱いをするでしょうが、その後はあなたの顔もまともに見ないでしょう。話してください、何故そんなに悲しいのですか？」

「私の父メレックが執事にした男を彼らがどう切り刻んだか見ただろう。そして何人の従者を絶壁から突き落とすだろう。そして私にタフィを渡す時のあのヌレッデヒルの態度。」「ハーン、あなたの兄はタフィのせいで興奮していたのですよ。」「エヴリヤ、お前は分かっていない。」彼は横になりキルトを引き上げた。～省略～

突然、腰帯を巻き袖を巻き上げたヌレッデヒルが現れた。ゆっくり忍び寄り伸びと欠伸をして指を鳴らし、背骨を鳴らし、短剣を取りベルトに巻きつけた。～省略～

突然彼は短剣を手に取り、ハーンのカルトを掴み取ると、彼を蹴り「起きろ！」と叫んだ。ハーンは目を開け、兄を見た。ヌレッデヒルは叫びながら短剣をハーンの胸に突き刺し、腰まで下げた。恐怖で無意味に自らの短剣を掴みながら、ハーンは床に転げ落ち、そこにまたヌレッデヒルが剣を突き刺した。～省略～

一方ハーンは何とか持ちこたえ、ルステムが何とか反対側からおさえるヌレッデヒルと戦っていた。しかしかなわなかった。空虚なこの世から喜びと永遠の世界へ旅立った。

(EÇ, pp.376-379)

こうしてズィヤーエッディン・ハーンはヌレッデヒルにより殺される。エヴリヤ・チェレビーはこの直後にビトリスから逃げ出してしまうが、無事メレック・アフメト・パシャのもとへ戻った彼のもとへ届いたアブダル・ハーンからの手紙により、復讐に立ち上がったビトリスの人々にヌレッデヒルも殺されたことが分かる。

3.モラ・メフメトについて

モラ・メフメトはエヴリヤ・チェレビーのビトリスの旅行記に登場する人物の中では、少し特異な存在となる。メレック・アフメト・パシャとアブダル・ハーンの対立に巻き込まれた彼につ

いて見てみる。

モラ・メフメトについてエヴリヤ・チェレビーの記述から分かることは、彼がクルド人で魔術師である、ということだ。彼とエヴリヤが初めて会ったのはアブダル・ハーンがメレック・アフメト・パシャの一行を最初にもてなした宴会の時だった。ハーンの付き添いの兵士達が何かを囲んで笑っているの、その騒動の原因を見に行っただのがきっかけだった。兵士達はモラ・メフメトを囲んで笑っていたのだ。エヴリヤ・チェレビーのその時の記述はこのようである。

恐ろしく醜く、すずめの巣かと思うほどの高いターバンをしていた。痩せ馬に乗って、手には蛇を持ち、ムチのように使っていた。馬は一方の足を前に出していたが、一方の足は墓に突っ込んでいたようだった。つばが泉のように口から流れ出し、目には輝きがなく、足はミントの茎のようで、骨は外に飛び出ているので一本一本数えられるほどで、酔った男のように歩いていた。この陽気な男は蛇で馬をたたいたり、飛び乗ったり降りたりしながら様々なアクロバティックをした。その周りには人が集まり、笑っていた。

(EÇ, pp.44-45)

またアブダル・ハーンは、自らの宮殿でパシャをもてなした際、モラ・メフメトに芸を披露させる。モラ・メフメトがアブダル・ハーンの宮殿で披露した芸はこのようなものだった。

モラ・メフメトが広場に入ってきた。彼はボロボロの服を着ていた。パシャの前で礼をすると、辛らつにクルド語で「何故この場に呼んだのだ？あなたは私をこのボロボロの服のせいで食事には呼ばなかった。だが今、私の芸が見たいという。」と言って広場に袋を投げた。

彼は広場を跳ね回り、やがて観客の頭の上を飛びながら尿をしだす。

モラ・メフメトは、ハーンとパシャのところへやってくる。ハーンは「あの悪魔を撃ち殺せ。」と叫ぶ。すこしして、モラは地面に降り、キスをする。

もはや、尿のあともなければ濡れた人々も居なかった。観客は皆元に戻った。パシャは驚きのあまり指をくわえていた。ハーンは「モラよ、何か他の技も見せてくれ。」と言った。「お望み通りに。」とモラは答える。

モラはすべてのドアを閉めさせた。四方が城壁のようになった。モラは袋からボロ切れを取り出し、すべてのドアや通気孔に詰めさせた。袋からコップを取り出し、水を飲むと、また観客に向かって大量の放尿をしだした。そのうちモラの尿で広場に湖を作り出した。観客は恐れて泣き出したが、逃げる所がない。モラが袋の上に乗る湖に浮く頃には観客は溺れかけていた。観客は「ドアを開けてくれ。」と頼んだ。

パシャがハーンに「何が起きているのだ。あなたの家で人々を死なす気か。」と言うと、ハーンは「命に危険はありません。もう少し辛抱してください。」と答えた。

パシャやハーンが助けってくれないと分かったら、泳げる人は服を脱ぎ、海にいるように泳ぎだした。他の人々は階段をよじ登ったり、互いに重なり合ったりした。大混乱となった。私はパ

シャの大天幕からこの様子を見ていた。モラは、水晶の玉を取り出し、石とぶつけた。その音は時計のベルのように響いた。そのとたん、すべての水が消えた。裸の人々がコウモリのように窓にしがみついていた。それを見てパシャやハーンが笑った。(EÇ, pp.122-127)

この後もモラ・メフメトの芸は続く。しかし、この後モラ・メフメトが披露した芸で彼がドラゴンを出し、広場を大混乱させたことでメレック・アフメト・パシャはに驚き慌て、彼に対して「地獄に落ちるがいい。」と怒りを見せる。そのためアブダル・ハーンはこう言ってなんとか彼を擁護する。

彼とは10年一緒にいますが、ワインもタバコもコーヒーも飲みません。彼は夜祈り、朝まで断食しています。彼はダビデの断食に依存しています。彼は屠殺された動物の肉は口にせず、1日5回の祈りも欠かしません。この技はモロッコのマラケシュで覚えてきました。すべては催眠術であり、誰にも危害は加えません。

(モラ・メフメトが持っていた袋の中にあった動物の皮や生きた動物についてパシャに尋ねられて)彼の技はすべて自然のものや神が創り出したものに基本があるのです。彼は必要とされるとこれらのものにその技を使い、人々に催眠をかけるのです。

(EÇ, pp.132-133)

しかしアブダル・ハーンとモラ・メフメトの関係は決して良いものとは言えない。最初にエヴリヤが彼と会った際も、ハーンは自分のパレードを彼が笑いものにすると断ってパレードへの参加を禁じた。ハーンの毒見役のムスタファは、それはハーンがパシャに自分が魔術師を抱えていることが知れるのを恐れたからだ、とエヴリヤに説明する。だがパシャへのもてなしとしてモラ・メフメトの芸を披露した、ということはそこまで彼の存在を隠そうとしていたわけでもないようだ。

モラ・メフメトは結局アブダル・ハーンのコマで殺される。以下がその時の場面。モラ・メフメトがエヴリヤに目の前でスキーをしていた少年にスキーで坂を登らせる、という魔術を披露していた時だった。

いつもハーンの前で巨大な斧を持っている長身のアルトゥ・クラチが運命の雲のように我々のそばに現れた。「エヴリヤ・チェレビー、ハーンが庭の窓から数回手招きしたが無視した。ひとりで会いたがっている。行け。」と言った。

「それじゃ行こう。」と私が立ち上がった。モラも同様に。するとヌレドデヒルが突然斧をモラの頭に振りかざした。脳みそが私の顔や肩にはね、恐怖で飛びのいた。ヌレドデヒルはモラの服を取り、死体を絶壁から雪の上へ落とした。(EÇ, pp.362-365)

ハーンはこの理由をエヴリヤに問われ、「あの男はずっと私の世話になってきたにもかかわら

ず、ハイダル・ケトヒュダと共謀して、彼に『メレック・アフメト・パシャに、ヴァンの兵と共にここに来させるのだ。私はハーンの軍とパシャの追跡軍に魔法をかける。ハーンを彼らが殺す。彼の息子がハーンになるだろう。お前はずっと執事をすればいい。私は ビトリスのカディになる。』と言った。これが、私がハーンと戦っている間あいつがしたことだ。だからあの日、私の兵が配置されていて、私はムディキ山に逃げねばならなかった。私は無事で戻ってきて、あいつを殺した。」(EC,pp.366-367)と答えている。エヴリヤはハーンには「それが本当ならば、彼の死体に石を投げつけましょう。」と言うものの、モラ・メフメトを今までで一番の魔術師であった、と表現している。

第6章 考察

以上のエヴリヤ・チェレビーの旅行記に描かれた 3 人のビトリスの有力者から、オスマン朝とクルド人支配者の関係を考えてみる。

まずモラ・メフメトを見ると、アブダル・ハーンの権力増大や独立を嫌うオスマン朝の姿勢が見える。モラ・メフメトについて宗教的な事柄が書かれている部分は全くない。また、彼が周りの人々に対して、魔術を披露している間を除いて、何か影響力を持っていたようなことが書かれている部分もない。よってあくまで推測だが、彼がエヴリヤの前で何度か披露した手品のような魔法から、彼が神秘主義教団のスーフィーであったのでは、という推測ができるのではないかと。サファヴィー朝が、元々サファヴィー教団という神秘主義教団であった事などを考えても、民衆に影響力や人気があったはずのモラ・メフメトをアブダル・ハーンが利用し、その支配力を強化しようとしていたのではないだろうか。

アブダル・ハーンはモラ・メフメトに対し、厄介者のような扱いをしたり、彼を擁護するような発言をしたり、結局は無理やりと思える理由で彼を殺すなどし、その扱い方からは彼の存在をどのように考えていたのかわかりかねる。しかしメレック・アフメト・パシャ にとっての彼の存在ははっきり読み取れる。ハーンのもとでの 10 日間の滞在を終えたパシャは、ハーンに対して諭す時、ハーンへの警告として、決してペテン師や魔術師の意見に惑わされないように、と述べている。モラ・メフメトの存在がパシャの言うペテン師となるならば、それはつまり彼の存在がパシャにとってハーンが自らにそむく危険要素となりうることをさすだろう。オスマン朝以外にハーンに影響を及ぼす存在になりうる可能性があったということだ。このことから、オスマン朝が部族長の思想に影響し得るような得意な存在を嫌っていたことが分かる。

ビトリスがメレック・アフメト・パシャ率いる大軍に征服され、大きくその独立性を失ってしまったあとで、アブダル・ハーンがまるで敗因が彼であるかのようにして彼を殺したのも、彼がある程度の権力、または影響力を持っていたからかもしれない。

次にズィヤーエッディン・ハーンを見てみると、彼を取り巻く様々な状況からいくつかのことがわかる。

まず、彼をビトリスのハーンへと推薦するビトリスの有力者達の言葉からは、ビトリスがオスマン朝の直接の支配下に置かれることを彼らがいかに嫌っていたかが分かる。その為にビトリス

の有力者達はアブダル・ハーンの死を願い、メラズギルドのメフメト・ベグ等にアブダル・ハーンが作った借りも返す、とメレック・アフメト・パシャへ誓った程だ。

また、結局こうして彼がビトリスのハーンとなったことで、オスマン朝の側から見れば反抗的なアブダル・ハーンに代えて新たなハーンをうまく置けたこととなる。しかも彼のハーンへの就任は、兄弟の間に憎悪の感情をもたらすこととなり、結局彼は兄に殺される。これもまたオスマン朝の側からすればうまく部族間の亀裂を創り出したということになる。すべてが計算のもとで行われたかどうかは、もちろん分からないが、彼が殺害される直前のエヴリヤ・チェレビーとの会話を見ても、これらの亀裂から彼の気持ちがオスマン朝に傾いていること、そしてオスマン朝の直接の支配下に入っても彼が今まで通りの扱いをオスマン朝から受けられないだろう、ということが分かる。結局オスマン朝は、直接支配を嫌う部族長に、うまく自らに近い、しかも部族内の人間を置き、部族内に亀裂を作り、さらに部族長の心を掴み、直接支配を狙っていたように思われる。

また、アブダル・ハーンのところであげた、ズィヤーエッディンがハーンになった後の、エヴリヤと一族の人々の関わりを見ると、隠居後のアブダル・ハーンはビトリスにおいて昔持っていたような影響力や権力を明らかに失っていることがわかる。しかし新たにハーンとなったズィヤーエッディンが以前のハーン程の影響力を周りに対して持っていなかったため、兄弟内での争いがおこり、それが直接ビトリスの政治を揺るがす原因となっているように思われる。

ビトリスへのメレック・アフメト・パシャの進軍に関して、エヴリヤ・チェレビーの旅行記では、少なくともそのきっかけはハーンが存在を嫌う人々がパシャをけしかけたように書かれている。またパシャ自身も戦いの前にハーンへ手紙を送って謝罪を求めるなど、できればそのような事態を避ける事を望んでいたと思われるような箇所もある。(EÇ,pp.164-169)しかしビトリス進軍がどのように決定されたにしろ、結果としてパシャへの忠誠を表す為に利用されたはずのズィヤーエッディンも、結局はオスマン朝にとって都合のいい存在として扱われることになった。メレック・アフメト・パシャがすべて計算して行動していたのかどうか定かでないにしろ、それまでのビトリスのアブダル・ハーン一族と彼の関係が、一族の内部分裂を引き起こすのもうまく役立っている。そう考えると、すべてはいずれビトリスでのハーンの権力を奪うことを想定して進められていたのかもしれない。

このようにアブダル・ハーンとその息子ズィヤーエッディンを見てみると、オスマン朝がクルド支配者と良い関係を保ちつつも、結局は反抗的な支配者を力づくで押しのけ、自分に都合のいい部族内の人間をうまく代わりに置いていたことがわかる。このことから、本論により、第1章であげた、これまでの研究により言われている、オスマン朝のクルディスタン支配の方法が確かめられたと言えるのではないかと考える。すなわち、オスマン朝が表向きはクルド支配者と良い関係を保ち、うまく部族内に入りこみ、オスマン朝に依存するような支配者を立てていたこと、部族内に亀裂を生じさせ、うまく部族をコントロールしていたことが確認できたと考える。

<参考文献>

- 永田雄三・羽田正 『世界の歴史 15 成熟のイスラーム社会』 中央公論社 1998
- 鈴木董 『パスク・イスラームカの世紀』 講談社 1993
- イスマイル・ベシクチ 『クルディスタン＝多国間植民地』 柘植書房 1994
- S.C.ペレティエ 『クルド民族 中東問題の動因』 亜紀書房 1993
- McDowall,David, A Modern History of the Kurds, I.B.Tauris&Co Ltd, London, 1996
- Özoğlu,Hakan, “State-Trbe Relations:Kurdish Tribalism in the 16th-and17th-Century Ottoman Empire”, British Journal of Middle Eastern Studies, 23/1, 1996
- Dankoff, Robert, Evliya Çelebi in Bitlis, E.J.Brill, Leiden, 1990
- Bruinessen,Martin Van, Agha,Shaikh and State:The Social and Political Structures of Kurdistan, Zed Books Ltd, London, 1992
- Dankoff,Robert, The Intimate Life fo an Ottoman Statesman Melek Ahmed Pasha(1588-1662) as Portrayed in Evliya Celebi's Book of Travels (Seyahat- name), State University of New York, Albany, 1991
- “Bitlis”, Türkiye Diyanet Vakfı, İslam Ansiklopedisi, Cift6, İstanbul, 1996
- “Evliya Çelebi”, Türkiye Diyanet Vakfı, İslam Ansiklopedisi, Cift11, İstanbul, 1996